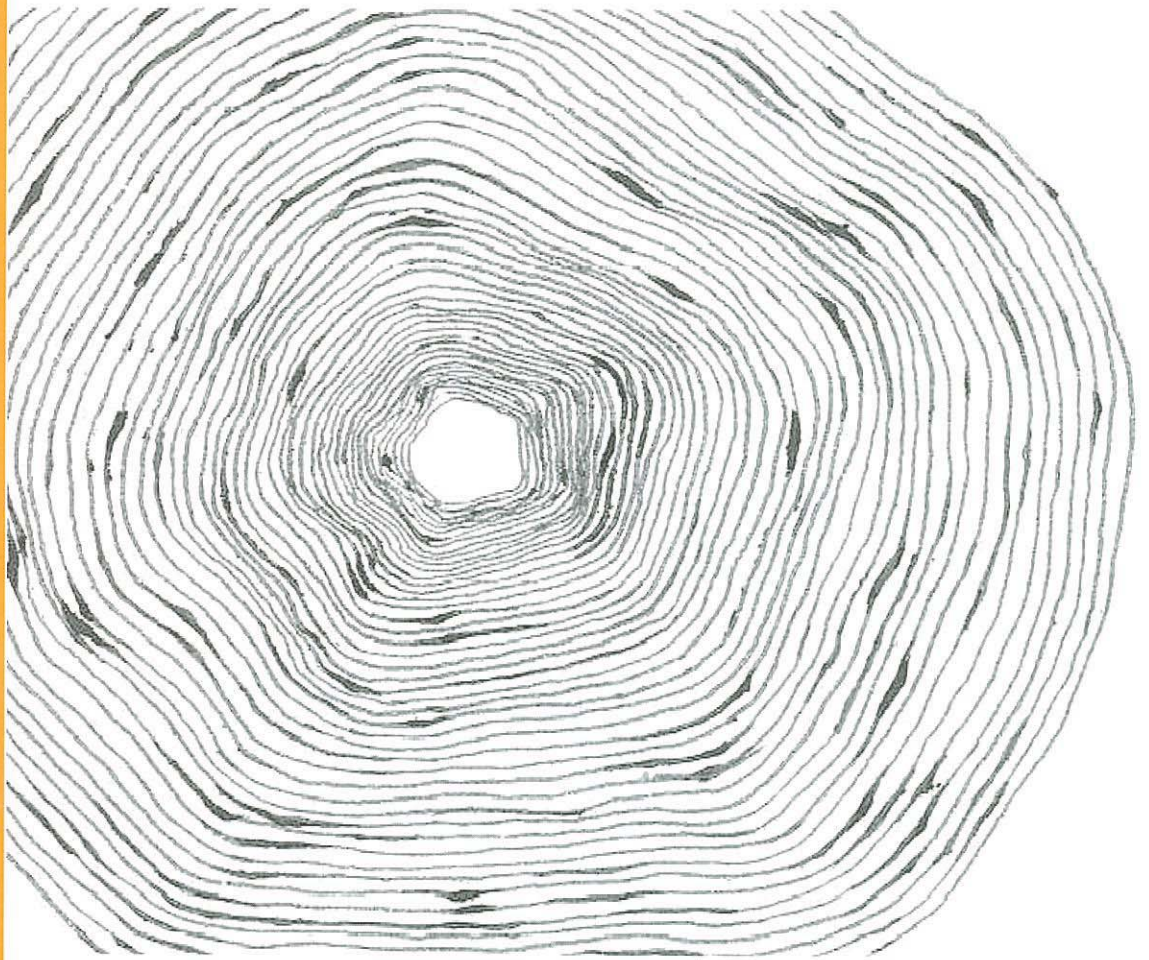


Annual Report 2009-
Annual Report 2010-
2009
2010



SUEMOTO, TAMOTSU

Action Research Center for Human and Community Development
Graduate School of Human Development and Environment, Kobe University

神戸大学人間発達環境学研究科
ヒューマン・コミュニティ創成研究センター

Director's Review

朴木 佳緒留（人間発達環境学研究科長・兼任）

2005年4月、神戸大学大学院人間発達環境学研究科（2007年改組）の附属施設として開設されたヒューマン・コミュニティ創成研究センターは、2010年4月に5年という節目の年を迎えました。当センターはこれまで、人間らしさあふれるコミュニティの創成を目指し、地域や学校、行政、企業、NPO等と協働しながら、大学の内外で多様な取り組みや実践的研究をおこなってまいりました。今後私たちは、それらがもたらした効果を検証しつつ、センター運営のあり方や方向性を再検討することが重要であると考えています。

最近のおもな活動（2009～2010年度）を紹介します。

現代GP『アクション・リサーチ型ESDの開発と推進』・大学院GP『正課外活動の充実による大学院教育の実質化』はともに2009年で最終年度を迎えました。これらのプロジェクトを発展させるために、これまで現代GPから支援を受けていたESDサブコースには、2010年より「全学部ESDサブコース推進検討委員会」が立ち上がり、全学化に向けて再始動しています。また大学院GPは「学術Weeks」の恒常的運営、「正課外活動証明」発行の継続をおこなっています。また学外の組織や団体、学校との連携・協働も促進され、2010年度は以下の協定を結んでいます。

- ・国立療養所邑久光明園との包括的な事業連携に係る協定
- ・ソウル市立知的障害人福祉館との交流協定
- ・甲南女子大学とのボランティア促進プログラムに係る相互協力

また、研究科サテライト施設である「のびやかスペース あーち」は、2009年9月に神戸市から市民福祉顕彰奨励賞（児童福祉）、さらに2010年10月には、学長表彰を授与されました。市内初の大学と行政の連携による大規模な子育て支援事業をおこない、子ども家庭福祉に多大な貢献をしたことが評価されました。

本アニュアルレポートは、2009年～2010年度のセンターの動向や各部門の研究・実践報告をまとめたものです。多くの皆さまから忌憚のないご意見やご助言をいただければ何よりの幸いに存じます。



Contents

Director's Review

センター長挨拶

Contents

目次

Outline センター概要→	3
Special edition 特集 「アゴラとインクルーシヴな社会づくり」 仮→	5
Action Research 2010 年度実践的研究の内容→	10
Topics→	13
<ul style="list-style-type: none">・ のびやかスペースあーち・ 「あーち通信」の絵本コーナーの担当教員からみた学生の社会貢献・ 保育士のためのステップアップセミナーに参加して・ ESDサブコース・ ESDボランティア育成プログラム事業の概要		
Outline of each section 各部門の概要→	19
Co-workers 運営協力者・共同研究者→	26
Access / Staff アクセス / HCスタッフ一覧		



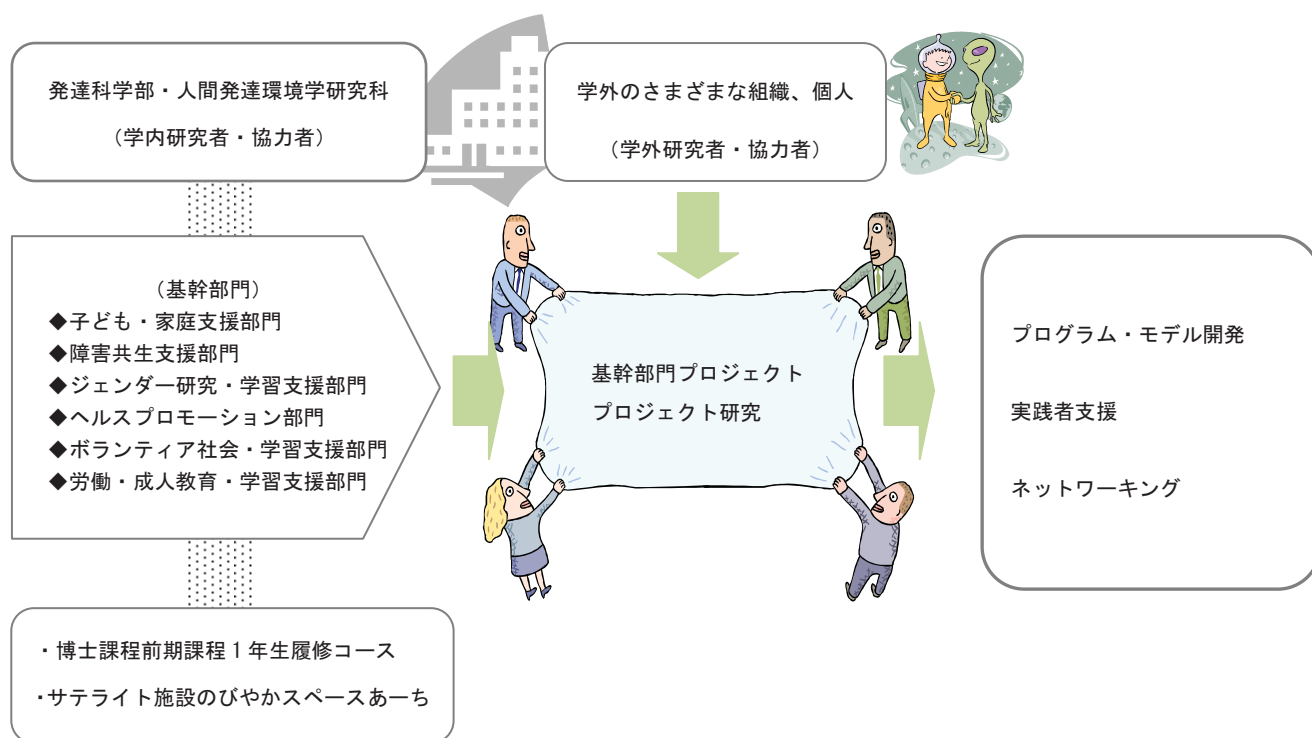
Outline

ヒューマン・コミュニティ創成研究センター

ヒューマン・コミュニティ創成研究センター（以下、HCセンター）とは、神戸大学大学院人間発達環境学研究科に設立された発達支援インスティテュートのもとにあり、これまで研究科で蓄積されてきた研究成果と、地域などですでに行われている実践との間に、太いパイプをつくっていかうとするものです。人間の発達支援に関わる活動を行っている地域組織、NPO、NGO、企業、行政、学校等の人々と連携しながら、研究・実践を深め、人間性にあふれた多層・多元的なコミュニティの創成を目指します。

HCセンターには6名の専任教員がおり、それぞれ基幹部門を運営しています。6つの基幹部門ではさまざまなプロジェクト研究が展開されており、多様な実践的研究が構成されています。各プロジェクトは、リーダーである専任教員と学内および学外の研究員・協力員が担っています。

また、すでに企業、自治体、学校、NPOなどで活躍中の社会人を対象とした1年制修士課程も設けられています。発達支援に関するさらに高度な実践的・専門的な知識や技法のスキルアップを行い、現代的課題に対応した社会的活動に資する人間の育成を目指しています。



Special edition

特集

アゴラとインクルーシブな社会づくり



—カフェ「アゴラ」での実験—

カフェ「アゴラ」は、神戸大学大学院人間発達環境学研究科の学舎6階に2008年4月から開業しました。大阪湾を一望できる景色のいい立地で、仕事や勉強に疲れた学生や教職員がホッと一息つき、コミュニケーションを楽しみながらパワーアップする福利厚生施設です。

「アゴラ」は、大学が直接運営をしており、研究室に囲まれた場所にあるという点でもおもしろいお店ですが、さらにヒューマン・コミュニティ創成研究センターが中心となって人とコミュニティを育てる実験的な試みを展開している現場でもあります。障がい者たちが生き生きと働き、活動する拠点とすることで、働いている人たちと学生や教職員とが交流し、相互に学びあうとともに、大学内に新たなコミュニティを形成しようという試みです。



「アゴラ」の初代マスターは吉田収さんという脳性マヒのある男性です。養護学校を卒業後にカメラマンをめざして専門学校に入学。そこで健常者と一緒に対等に仕事をしたいという気持ちが芽生え、自ら喫茶店を経営。震災や障害者自立支援法※1によって人生を揺さぶられた果てに、「アゴラ」のマスターに就任した、経験豊富なおじさんです。



また、社会経験を積もうと通っている20代から40代までの知的障がい者10人ほど、**「アゴラ」**の仲間です。通常の障がい者施設ではできない経験を求めてやってくる人たち、行き場を失ってひきこもりを経験した人たち、家族内に大きな問題を抱えていたり入所施設で長く生活していたりして極端に元気を失った人たちなどが参加しています。彼らは**「実習生」**として、職員や学生の支援を受けながら、「アゴラ」で生き生きと活動を始めています。

●障がい者就労支援のジレンマ

実習生たちにとって、「アゴラ」は次のステップに飛びたつ準備をする場所です。「アゴラ」で多くの人たちと関わりながら元気を取り戻し、自分たちが輝く場所を社会の中に見つけて巣立っていくことをめざしています。

最初は狭い人間関係の中で安心を得ようとしていた実習生の多くは、「アゴラ」で活動しているうちに、もっといろいろな経験をしてみたいと思うようになってきます。ヒューマン・コミュニティ創成研究センターは、神戸大学生生活協同組合・NPO法人環境と福祉を考える会と連携協定を結び、実習生の仕事づくりにも取り組んでいます。生協の棚卸し作業や清掃作業などを通して、働く意欲を高める実習生もいます。

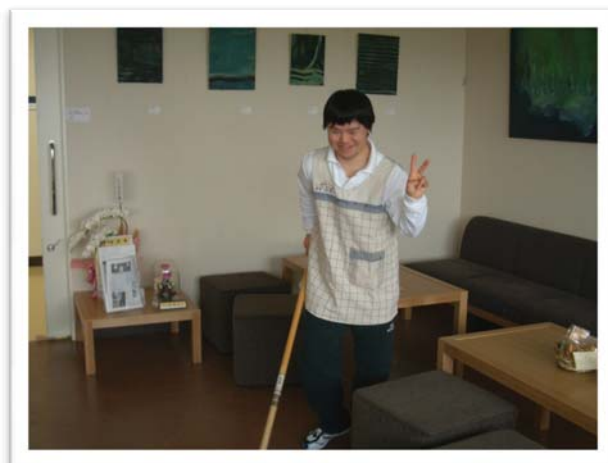
一般就労への意欲が高まった人には、就職活動の支援もします。アルバイト募集の応募や面接に挑戦したり、就職説明会に出かけたり、特例子会社を見学したりします。けれども、そのたびに思い知らされるのは就労の壁の高さです。障がい者を雇用する企業が増えてきているとはいえ、まだまだ個々の障がい者にとって仕事を求めるのはたいへん難しいことです※2。

こうした状況の中で、「アゴラ」の実習生を支援する試みに2つの大きな課題が見つけれられます。ひとつは、どうしたら実習生たちの働く意欲に沿った仕事を見つかったり、つくったりすることができるか、という課題です。もうひとつは、就労したいという実習生の気持ちを高めつつ、就労できなくても生き生きと生きる意欲を持続させることができるか、という課題です。

●たくさんの人と関わること

賃金労働に就くことだけが、実習生たちの人生の目標ではありません。働く意欲以前に、生き生きと生きる意欲がなければなりません。「アゴラ」は、多くの実習生に生きる意欲を育てるための良好な環境だといえるでしょう。例えば、20年にわたってひきこもりの生活を送っていた人が、毎日楽しく活動をすることができるようになり、今ではさらに外の世界に向かって飛びたとうとする意欲を高めています（ヒューマン・コミュニティ創成研究センター『インクルーシヴな社会をめざす実践』障害共生支援部門報告書、2009年に詳しい記録があります）。「アゴラ」では、活動の選択肢をつくり、自分で目標を決めて取り組むことをめざしています※3。いつもあたたかく見守る人たち（支援者だけでなく、学生や教職員）が近くにいて、励ましてくれます。※4

「アゴラ」でのコミュニケーションの意義深さを実感しているのは、学生たちも同じことのようにです。2009年度には、「アゴラ」をめぐる学生の行動と意識の調査をして卒業論文に仕上げた学生がいました。その学生自身は障がい者支援事業所に就職していきましたが、実習生と深く関わりをもったことも人生の選択の決め手になったようです。この学生の調査によると、376人の回答者のうち、「アゴラ」を利用したことがあるのは126人（33.6%）であり、さらにその中で「障がいのある人と話してみたくない」と答えている人は8人（6.3%）に過ぎませんでした。また、「アゴラ」で働いている人とのコミュニケーションに積極的である人ほど、障がいのある人が働くということについての理解が深まっていることもわかりました。（泊由布紀『神戸大学「みのり」プロジェクトおよび「カフェ・アゴラ」の調査に関する報告』2009年度卒業論文）



●実践モデルとしての「アゴラ」

「アゴラ」は現代社会のさまざまな矛盾が凝縮してあるところです。なぜ大学の中に障害のある人たちの活動の場があるのか？と学生が疑問に感じた時点から、矛盾の気づきへと扉が開かれるのかもしれない。能力主義社会から排除された人たちの生きづらさは、実習生と少しでも関わると即座に感じられることです。同時に、彼らの排除によって私たちが当然と考えている社会が成り立っていることに気づくことのできる場所とも言えます。また、本来は社会全体で取り組むべき課題が個人の問題として押しつけられている、ということが実感される現場でもあります。それゆえの家族の苦悩、問題を抱え込まされた人たちの無能力化にどのように立ち向かっていくことができるのか、ということが問われる現場でもあります。

こうした、本来は社会の課題であることがらを社会成員が自覚していくプロセスを生み出すことが、「アゴラ」における、ヒューマン・コミュニティ創成研究センターの実践の最大の使命だと考えています。重たい問題を重たく扱おうと、多くの人たちは敬遠するでしょう。「アゴラ」という素敵な空間で自然な出会いを通して、気づきの扉に開かれていく。私たちがめざしているのは、人間が生活の中にある気づきから学んでいくことによって、社会が変わっていくプロセスを大切にしたい実践モデルの形成です。※5



※1 2006年から施行され、違憲訴訟も各地で起こった障害者自立支援法は、多くの障がい者の人生に大きな影響を与えました。吉田さんもその一人で、神戸市からの補助金を得て運営していた小さな作業所としての喫茶店が、この法律の影響下で成り立たなくなりました。法律は、効率的な事業運営に転換させるために事業規模の拡大を迫ったのでした。それまで5人未満だった障がいのある利用者を20人以上に増やさなければならず、吉田さんは喫茶店を廃業する決意をしました。

※2 一定の基準を満たす企業等の事業所は、全従業員のうち障害者手帳をもった人の割合を定めた法定雇用率を満たさなければなりません。事業所の種類によって若干異なりますが、だいたい2%前後です。2008年の厚生労働省の発表によると、法定雇用率をクリアする企業は44.9%、企業や行政機関で週30時間以上働いている障がい者は約38万人とあります。日本全国には600万人以上の障害者手帳をもった成人がいるので、障がい者のうち一般就労しているのは16人に1人くらいという計算になります。

※3 カフェでの接客、調理補助、広報、清掃などの他にも、大学事務の請負作業、生協の棚卸し作業、資格取得に向けた勉強、実習農園での作業、図書室開架図書整理など、本人の意思次第で作業はたくさんあります。ただし、これらは原則として実習であり、無償の作業としています。

※4 障がい者が、むりやり入所施設に入れられたりするのではなく、自分で選択した生き方をできるように、制度の整備がなされるようになりました。具体的には、家族からの支援がない人であっても地域社会での生活を可能にするために、地域生活支援の体制が構築されつつあるということです。地域で質の高い生活を実現するためには、フォーマルなサービスを整えるだけでは足りません。幅広い地域住民との関係の中で、障がい者の生活が構想される必要があります。住民を広く巻き込む地域福祉政策、障害のある人たちの自己決定を支える取り組み、障害のある人たちの望んだ生活を実現していくための取り組みなどが、今後いっそう重要になっていくと思われます。

※5 もちろん「アゴラ」は障がい者支援のモデル開発という意図ももっています。障害者自立支援法の体系では、障がい者の就労に向けた支援を多様な機関が担うことが奨励されるようになった点は明るい材料です。例えば、企業もこの法律に基づく補助金を受けながら、最低賃金以上で障がい者に働く機会を提供することができます（但し、支援期間は2年）。それでも就労に結びつく人たちは少数にすぎません。雇用の枠組みを広げていくと同時に、雇用以前に障がい者が社会に貢献したり生きがいを感じたりすることができる社会参加の機会を増やしていく努力も大いに必要です。「アゴラ」は障害者自立支援法に基づいた事業ではありませんが、障がい者と社会とを繋ぐ小規模で効果的な新しいモデルとなりえるのではないかと感じています。

プログラム・モデル開発

特定の社会的課題を解決する手法として、人間の発達や認識変容を促すプログラムの開発を行っています。プログラム・モデル開発の効果は、プログラム実施の成果ばかりでなく、プログラム作成や実践組織の組織化、プログラム実施の中で起こる非意図的な副次的効果も重要だと考えます。

そこで、プログラム・モデルを次のような幅広い視点から追究します。

- プログラムが前提にしている価値についての原理的な探究
- プログラムと当該の社会的課題との関係の記述と分析
- プログラム実施のための条件づくりについての記述と分析
- プログラムを実施した際の効果測定
- 反省的事例も含めたプログラム作成過程の記述と分析
- 汎用可能なプログラム・モデルの開発

- ・ ライフスキル教育プログラムの開発（ヘルス）
- ・ 性教育プログラムの開発（ヘルス）
- ・ 高齢者の自己発見学習のためのプログラム開発（労働・成人）
- ・ 農業改良普及活動の教育方法の開発（労働・成人）
- ・ 教師のためのセクシュアルハラスメント防止研修プログラムの開発（ジェンダー）
- ・ 「お母さんのためのゆっくり・解放プログラム」開発（ジェンダー）
- ・ アウトリーチ事業「ペリネイタル・アウトリーチ」（子ども・家庭）
- ・ ペアレンティング事業「0歳児のパパママセミナー」「1～2歳児のパパママ交流会」（子ども・家庭）
- ・ 次世代育成事業「赤ちゃんふれあい体験学習」（子ども・家庭）
- ・ ESDモデル開発「ESDボランティア塾ぼらぼん」事業（ボランティア）
- ・ 居場所づくりプログラム（障害共生）
- ・ 博物館機能を生かした共生のまち創成（障害共生）
- ・ 知的障害のある人たちと学生の相互交流を通じたキャリア開発「みのり」（障害共生）
- ・ 学童保育を中心としたインクルーシブな地域拠点創成支援（障害共生）

実践者支援

人間の発達を支援する人たちや、学習者、ボランティア等の活動を支援することを通して、実践者のエンパワメントを目指すとともに、実践者支援の方法、実践の意味づけや課題について追究します。

- 実践者に必要な技能や知識に関する追究
- 実践者の社会的位置や心理・価値の内在的分析
- 実践者支援プログラムの開発・実施・効果測定

- ・ 福祉教育実践研究隊事業（ボランティア）
- ・ 知的障害のある人たちのセルフアドボカシー支援（障害共生）
- ・ 「健康教育ワークショップ」（ヘルス）
- ・ 専門職支援事業「保育士のためのステップアップ・セミナー」（子ども・家庭）
- ・ 支援者養成事業「まちの寺子屋師範塾」（子ども・家庭）
- ・ 六甲の語り部交流会の活動への支援（労働・成人）
- ・ コウノトリ育む農法の語り部育成への支援（労働・成人）
- ・ ESD豊岡「豊岡から始まるESD」の開催（労働・成人）

ネットワーキング

特定の社会的課題をめぐって、組織や個人のネットワークを形成することで、多面的な新しい実践的研究のフィールド創成を目指しています。ネットワーキングは、実践的研究の基盤整備という意味もありますが、そればかりでなく、新しい実践を生み出したり、新しい課題を提示したりするというネットワーキング自体のもつ価値にも着目します。

- ・ RCEの推進サポート（ボランティア、労働・成人、障害共生、子ども・家庭、ジェンダー）
- ・ 神戸大学「男女共同参画推進室」との協働（ジェンダー）
- ・ 社会教育におけるライフストーリー研究ネットワーク（労働・成人）
- ・ ASHVIFの研究会への参加（労働・成人）
- ・ ドロップイン事業「ふらっと」（子ども・家庭）
- ・ ESDボランティア育成プログラム推進ネットの運営補助（ボランティア、子ども・家庭）
- ・ 障害共生支援セミナー（障害共生）
- ・ JKYBライフスキル教育研究会活動（ヘルス）

その他

※1年制修士課程とは

HCCセンターと密接に関連する大学院として「1年制履修コース」があります。このコースは、「ヘルスプロモーション」「子ども・家庭支援」「ボランティア社会・学習支援」「障害共生支援」「労働・成人教育支援」「ジェンダー研究・学習支援」のいずれかの領域の実践活動の実績をもつ社会人を対象としています。学生はすでに行ってきた実践活動を、より広い視野の下でまとめ、考察することにより、修士の学位を取得することができます。

授業は基本的に夜間に開講し、HCCセンターで行っている実践的研究に関わりながら1年間で所定の単位を取得した上で、リサーチペーパー（修士論文）を提出することが求められます。

社会的実績をもとにした学位（修士）を得たい方、自らの実践活動の成果をまとめて一層の前進をはかりたい方は是非、ご応募ください。（詳細は学生係まで問い合わせ願います。電話：078-803-7924）

連携・協力

- 新潟県新潟市、埼玉県川口市、兵庫県伊丹市、兵庫県三田市、広島県福山市などの教育委員会と共同して、ヘルスプロモーションの指導者養成のためのワークショップの開催や、プログラムの有効性評価のための研究活動に取り組んだ。（ヘルス）
- 文部科学省より「新教育システム開発プログラム事業」の委託を受けた（株）キャリアリンクが実施した「ネットワーク型教員養成のあり方についての調査研究」に協力した。（ジェンダー、子ども・家庭）

のびやかスペース あーち



2010年11月

神戸大学の第2回学長表彰を受賞しました



人間発達環境学研究科長 朴木 佳緒留

「のびやかスペース あーち」は、子育て支援をきっかけにした共生のまちづくりを目指す、神戸大学大学院人間発達環境学研究科ヒューマン・コミュニティ創成研究センターのサテライト施設です。2005年に設立され、年間2万5千人の人が利用し、400を超えるプログラムが提供されています。「ドロップイン方式による子育て支援」は、今日ではあちこちで行われていますが、当初には珍しく、「あーち」を手本にしてつくられた子育て支援施設も多いです。

提供プログラムの多くがボランティアによるものであることも、注目されています。「あーち」開設当時に、経済評論家の内橋克人さんが「街に出る大学」という表現で、期待を述べてくださったことを思い出します。今日では、学生もボランティアとして関わるだけではなく、卒論、修論のデータをとったり、学芸員資格取得を目指して展示などを行ったり等々、「あーち」をさまざまに利用しています。この5年間には多くの方のご協力やご支援があり、また伊藤篤先生、津田英二先生をはじめスタッフの頑張りがあったからこそ、「あーち」を維持発展させることができました。学長表彰はこれらが評価された結果であると思います。この場をお借りして、「あーち」に関わったすべての方にお礼と感謝そしてお祝いを申し上げます。

- ・ 住 所: 神戸市灘区神ノ木通 3-6-18
- ・ 電 話: 078-805-6090
- ・ 交 通: 阪急六甲駅、JR 六甲道駅、各 15 分
三宮、阪急王子公園駅、JR 六甲道駅から市バス「将軍通」バス停下車すぐ(灘消防署の建物の2階)
- ・ 開 館 日: 火曜日～土曜日(日・月・祝日は休み)
- ・ 開館時間: 10時半～17時(金曜日は18時半)
- ・ <http://www2.kobe-u.ac.jp/~zda/arch-prep.html>



『のびやかスペースあーち』は2005年9月、灘区役所旧庁舎に開設されたヒューマン・コミュニティ創成研究センターのサテライト施設です。2006年以降、年間2万5千人を超える人々が利用し、400を超えるプログラムが提供されています。たくさんの組織や個人が協力して、「子育て支援をきっかけにした共生のまちづくり」を目指す実践的研究の拠点です。3つのスペース（ふらっと・あーと・こらぼ）と情報コーナーで構成されています。



ふらっとあーち

◆ふらっと（ドロップイン）◆

「子ども家庭支援部門」の基盤プログラムのひとつです。孤立しがちな出産後まもなくの親子が利用しやすい環境を整えています。親が子どもを遊ばせながら、他の親子と交流したり、ふらっとの相談員に育児・発達等の相談をしたりすることができます。

◆おひさまひろば あーち◆

保育士さんによるショートプログラム。歌遊びや親子ふれあい遊びが大人気！

◆ベビーマッサージ◆

利用者のボランティアで始まったプログラムです。ねんねとはいはいの頃に分けておこなっています。毎回、大勢の赤ちゃんとお母さんが参加しています。

あーとあーち



◆表現活動◆

「あーち」では、多様な自己表現の支援を通して、相互の関わりを活性化しようとしています。造形・音楽・ダンスのプログラムを継続的に実施しています。

アートセラピー らくがきおばさんがやってきた
めだか親子クラブ おりがみあそび など



こらぼあーち

◆居場所づくり◆

地域に居場所や関係をもちにくい人たち特に対象とした誰でも参加して楽しめる場づくりに取り組んでいます

◆「0歳児のパパママセミナー&赤ちゃんふれあい体験学習」◆

生後5か月の赤ちゃんが1歳になるまでの8か月間、毎月1回「あーち」に集まって月齢に応じた親のあり方を継続的に学ぶセミナーです。今までに小・中・高校生も参加して赤ちゃんや保護者と楽しくふれあいました。もちろん大学生や院生もボランティアとして関わっています。



☆建物の耐震補強工事に伴う一時移転について

<2010年10月~2011年3月>

神戸市からの要請があり半年間、一時下記に場所を移して運営しています。

★灘区民ホール（火・水・金）

1階ロビー（イベントスペース）で週3日「ふらっと」を開催。「居場所づくり」やアートや音楽系・習字のプログラムは、会議室を借りて運営しています。

★水道筋商店街「子育てほっとステーション」（木・土）

近隣の商店街の一角にオープンしたステーションに「あーち」のスタッフやボランティアリーダーが週2日、出前しています。手作りおもちゃ・紙芝居・絵本の読み聞かせのプログラムを展開しており、「あーち」の会員以外の利用者にも好評を得ています。地域に密着した面白い取り組みのひとつにもなっています。



「あーち通信」の絵本コーナーの担当教員からみた 学生の社会貢献



目黒 強

私の研究室のゼミ生が「あーち通信」の絵本コーナーを担当するようになって、3年目を迎えた。「あーち通信」2008年6月号から、ほぼ毎号にわたって、絵本を紹介している。2010年11月までに、13人の学生が担当し、27本の絵本を取り上げたことになる。

指導教員の専門が児童文学であることもあって、ゼミ生のなかには絵本に興味関心のある学生が少なからずいる。そこで、有志を募って、学生による絵本紹介というゼミ活動に取り組んできた。ここでは、このようなゼミ活動に取り組むことによってみえてきた学生の意識の変化について報告することで、学生による社会貢献の可能性を考える一助としたい。

現在、絵本紹介に取り組んでいる学生に意識の変化を訊いたところ、ある学生が次のような感想を寄せてくれた。頭には「絵本紹介をする」という意識があるので、「いい話だな」や「すてきな絵だな」で終わるのではなく、「この絵本を読んで子どもたちは、こんなことを感じてくれるだろうか」など、子どもたちへの思いを持ちながら絵本と向き合うようになったと思います。

絵本に対する漠然とした個人的な興味が絵本の読者に対する関心へと発展していることがうかがえる。このような意識の変化は、程度の差こそあれ、他のゼミ生にも共通して見受けられるものだ。

さらには、本活動をきっかけに、絵本を子どもに読みかせる保護者に関心を抱き、子育て支援の観点から絵本を研究する卒業論文を提出したようなケースもある。

いずれの学生も社会貢献を目的として絵本紹介に取り組んでいた訳ではないが、絵本を通した親子関係や子育て支援のような社会のあり方に学生の意識が向かうなど、コミュニティに対する関心が高まっていた。このような学生の変化には、社会貢献活動へと発展するような萌芽の意識がうかがえる。今後は、原稿を書くという間接的なつながりが「あーち通信」を読んでいる方々との直接的なつながりへと発展していくことを期待したい。



「保育士のためのステップアップセミナー」に参加して



木下 孝司

灘区の保育士さんを対象としたセミナーでお話をする機会をいただきました。保育実践において、パニックを起こしたり、友だちとの関係がうまくいかないなど指導の難しさを感じる場面で、何に目を向けてどんな方向で職員同士の話し合いをしていったらいいのかといったことが主な内容でした。

1990年代の終わり頃から、保育現場で「気になる子」が語られるようになります。背景には社会構造の変化やそれに伴う家庭の変化があるでしょう。そうした変化が子どもの発達にいろいろな影響を与えていることは確かでしょうが、そうした相互関連性を研究的に解明できていません。その一方で、現場の教師や保育者は目の前にいる子どもたちに対して、その子の実態から出発した実践を展開されています。厳しい現実を前に、実践が先行しているところが大きいわけですが、子どもを発達のにとらえていく視点、生活において子どもの実態をとらえていく視点など、研究的に深めていくポイントがそうした実践からも提起されています。

私自身、学生時代から保育や療育現場にお邪魔して、先生方のつぶやきや思いを聞きながら、自分の研究としては比較的ベーシックな内容を進めて参りました。研究成果を実践に役立てるというスタンスもある部分、必要となる場合もあるかもしれませんが、きわめて実践的な問題に、きわめて原理的理論的問題が隠されているようにも思います。私自身、二足のわらじを中途半端に履いてこれまでやってきて、そんな気づきも少しずつあります。

その一つが、2歳児をめぐる不思議な現象であったり、研究的に文字通りエアポケットとなっている2歳児の自己発達となるのです。保育で「気になる子」の発達やその支援を考えていく上で、2歳児における自己の発達とその内実を深めていくことに手がかりがあると考えています。

今回のセミナーでは十分に深めた話はできませんでしたが、2歳児の心の揺れ動きと2歳児保育で大切にしたいことなどを少々紹介した次第です。





ESD サブコース

「持続可能な社会づくり」を目指す人材養成

2007年度より文部科学省の「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」の支援を受けて、ESDをアクション・リサーチ（Action Research）の観点から推進しようとする取り組みを、発達科学部、経済学部、文学部の三学部共同のプロジェクトとして始めました。ESDはその発祥の経緯から、環境教育に傾斜した内容で実施されることが多いのですが、神戸大学では、「環境教育」の拡張・超越をめざし、汎領域的な視点に立ってESDの推進を図ってきています。環境をひとつの基軸としつつも、ESDに不可欠な開発・人権・貧困・平和・福祉などを組み込んだ複数の観点からのアプローチです。ESDが求められる現実是多様であり、複雑です。この課題に応えるべく三学部が協働し、現実参加型の新しいカリキュラムを開発し、学部横断のESDサブコースを2008年度より開講しています。



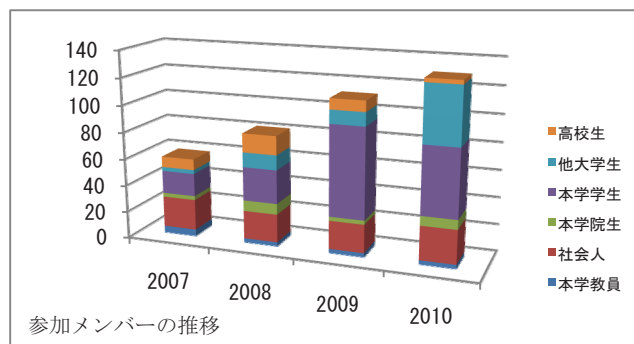
—ESDとは

ESD(Education for Sustainable Development)とは「持続可能な開発のための教育」のことです。地球規模の環境破壊や、エネルギーや水などの資源保全の問題など、人々が現在の生活レベルを維持しつつ、次世代も含む全ての人々により質の高い生活をもたらすことができる社会づくりが重要な課題になっています。第57回国連総会で「ESDの10年(Decade of ESD)」が採択され、2005年から2014年を「国連持続可能な開発のための教育の10年」とした国際的な取り組みが開始されています。

ESDボランティア育成プログラム「ぼらぼん」事業

高尾 千秋

2007年度からスタートした「ぼらぼん」事業も4年目を迎えた。本学教員3名、本学大学生50名、本学院生7名、他大学生42名、高校生3名、社会人8名の113名と協力団体スタッフ14名を含めると総数が130名となった。特に今年度は甲南女子大学からの参加学生が26名になり、7月にはヒューマン・コミュニティ創成研究センターと甲南大学対外活動研究センターとの間で「ボランティア促進プログラムに係る相互協力に関する覚書」を交し、相互に協力する体制も出来上がった。



連携を促進するコア事業としてのワークキャンプ

「ぼらぼん」の提案により2009年度から始まった、ハンセン病療養所 邑久光明園での「集いの広場づくり」事業は、園の将来構想のひとつに位置づけられた。2010年3月に、「集いの広場づくり」企画を自治会に提案し、4月以降相互に検討を加えながらの「集いの広場づくり」ワークキャンプ（以下「WC」と略す）を6月・8月・12月の3回実施した。



6月4日～6日(2泊3日)

8月6日～13日(7泊8日)

12月17日～19日(2泊3日)

ネットワークの拡大

夏WCでは、山陽女子高校放送部や京都ボランティア学習研究会主催の「京都・美山WC」のメンバーの参加を受けた。また、冬WCには、岡山県生涯学習センターとの連携から岡山市内の大学スタッフや学生、共同通信の記者、そして当日の山陽新聞の記事を見て岡山市周辺地からも2名の参加があった。「集いの広場づくり」という課題にWCを通じたネットワークが岡山地域にも広がりを見せてきている。

交流の深化

4年目となる今年度のWCでは、入居者との触れ合いも広がりを見せてきた。ビデオを趣味とされている入居者のAさんは、毎回電動車椅子で広場に来られ作業の様子を撮影されたり、学生との会話も弾んだ。早朝の居住区周り等では、入居者の方から「ご苦労さん」など気軽に声を掛けていただくなど、学生との会話場面がしばしば見られるようになった。4年間のワークを通じた活動実績が園や自治会の組織だけではなく、入居者個々にも認められてきているものと実感している。このような信頼関係が構築されて来たこと等から、邑久光明園・自治会と人間発達環境学研究所との3者による「包括的な連携協定」が、11月1日に調印された。ローカルな連携とグローバルな連携を結びつけることのできる事業としてとして、着実に発展してきている。



↑神戸新聞掲載記事

Outline of each section

ボランティア社会・学習支援部門



担当：松岡 広路
mkoji@kobe-u.ac.jp

ESD ボランティア育成プログラム推進ネット・ぼらぼん創成事業の展開

ESD（持続可能な開発のための教育）のモデルとしてインフォーマルな活動の組織化を企図した「ESD ボランティア塾ぼらぼん」事業は、「ESD ボランティア育成プログラム推進ネット・ぼらぼん」として名称を変更し、新たなステップに入った。部門をあげて、この企画を支援し、デザイン・運営・評価を行っている。また、協力組織の会議・学習会・連絡会の運営を補助する役割を担いながら、この事業の発展的意味も考究している。

（詳細は 18 ページへ）



「ESD 推進ネットひょうご神戸」(RCE 兵庫神戸)

「ESD 推進ネットひょうご・神戸」は、国連大学より認証を受けている RCE 兵庫神戸の愛称である。2010 年ブラジルで開催された ESD 国際フォーラム、タイ・バンコクでのユネスコ国際会議（APEID）に事務局として参加し、兵庫・神戸の ESD への取組を紹介した。

国立ハンセン病療養所「邑久光明園」「甲南女子大学対外協力センター」との連携へ

ぼらぼんの活動が紐帯となって、2010 年 11 月 1 日、岡山県瀬戸内市長島所在の国立ハンセン病療養所邑久光明園と本研究科の間で連携協定が結ばれた。また、同年 9 月には、ヒューマン・コミュニティ創成研究センターと甲南女子大学との間で「ぼらぼんプロジェクト」を共同で推進する等の協力に関する覚書が交わされた。

京都府社協と連携した「福祉教育実践研究隊」事業の展開

京都府社会福祉協議会と協働し、「福祉教育実践研究隊」の活動を継続している。2009 年度は「リフレクションプログラムの現実と課題」をテーマに社協職員とともに実践者にヒアリングを実施し、日本福祉教育・ボランティア学習学会研究大会において成果を発表した。2010 年度はアンケート・ヒアリング調査実施の準備を行い、2011 年度、本格実施する予定である。社協職員の力量形成の方法を開拓しつつ、新しい「福祉教育・ボランティア学習」の輪郭を探っている。

新しい学問としての「ESD 研究」の創成へ

一定の仮説のもとに多くのアクションをおこなってきた。もとより、これらはアクションリサーチとして新しい研究活動の一環として実施されたものであるが、部門研究員によって、2009 年度、2010 年度は学会発表・研究論文の発表がなされた。今後、新しい学問として ESD 研究が発展する基盤づくりをめざしたい。



担当：末本 誠

suemoto@kobe-u.ac.jp



① 異業種にわたる成人教育関係者による定例研究会の実施
月一回の定例の研究会を開催した（8月を除く）。定例会では、部門研究員それぞれがカバーする成人教育領域の事例を基に、下記の部門全体での実践・研究活動の実施や運営に関する独自の観点を持ち寄り、練り上げることによって成人が学ぶことに関わる実践的な研究活動を継続した。

② 学外での成人教育の実施に関するプログラム開発や方法論的な支援

・明石市のあかねが丘学園の事業として、ライフヒストリーを成人教育とりわけ高齢者教育に応用する事業を展開した。あかねが丘学園の受講者を対象にして、「自分史を書こう」というワークショップを開催し（全6回）、参加者の中からライフヒストリー実践のリーダーを育てるための支援をした。

・西宮市の戎座が取り組む人形劇を通じた地域の発展プロジェクトに関連して、戎座のメンバーとともに地域調査を実施し、地域住民の記憶として蓄積された集合的な経験がもつ地域資源としての意義とその活用について、議論する場を設け支援した。この活動は来年度以降も、継続される予定である。

・昭和初期の六甲周辺の歴史文化を記録するための、高齢者の生活体験の聞き取り活動に協力し、聞き取りの方法や意義の究明に関わる支援をした。

③ ライフヒストリーに関する国際的な研究交流

ライフヒストリーを成人教育に応用することを目的に展開する、国際的な実践・研究活動との交流を広げた。10月初旬にカナダのケベック州で開かれた、ケベック大学モントリオール校が中心となって進めるライフヒストリー成人教育の研究会に末本が参加し、部門の取組について報告した。また同月韓国の釜山国立大学で開かれた成人教育の研究フォーラムで、フランスのライフヒストリー研究と日本での研究動向についての報告を行った。

④ ESDに関する国際的な研究活動の展開

ESDに関する科学研究費による取組として、昨年度のガストン・ピノーに引き続き、フランスからラニニベル・マルティエヌ（ナント大学）、ナディア・ビール（同）を招請して、2011年3月に国際シンポジウム「ライフヒストリーを応用したHESD（高等教育ESD）」を開催した。この取組は、京都大学の前平研究室が取り組む、京都府か南山城村の洞仙房地区を拠点として「ローカルな知」の実践的研究活動と、連動したものである。

⑤ ESDの授業に関する取り組み

豊岡市新田地区の住民が開いた新田地区環境会議に学生とともに参加し、「コウノトリから見える新田と世界」のワークショップを開いた。また、兵庫県の楽農生活センターが実施した無農薬の米づくりに学生と参加し、参与観察を行い事業の効果や改善点に関わる提案をした。



担当： 朴木佳緒留

hounoki@kobe-u.ac.jp



「教師のためのセクハラ防止研修プログラム開発」のまとめとして、ブックレット「なくそう！スクールセクハラ」（かもがわ出版）を刊行した。一般に、「セクハラ防止研修」の多くは「べからず研修」となっている場合が多く、研修する当事者である教師からの評判も芳しくない。参加型の研修プログラムを開発し、そのような状況を変えようとしたのが、上記プログラムである。セクハラ防止は人権を守ることに他ならないが、いまだに「特別な目」で見られている。このような研修が「特別な目」で受け止められることなく、人間理解と結びつけられることを願っている。おかげ様でブックレットは順調な売り上げで、研修依頼も続いている。

2007年度に立ち上げた「お母さんのためのゆっくり・解放プログラム」開発は、子育て支援にプラスできる「ジェンダー問題学習プログラム」の開発を狙ったものである。同プログラム開発では、すでに参加型学習のファシリテーターとして活躍している市民が学外研究員に加わり、プログラム開発に取り組んでいる。地域には、優れた実践や実践者が存在するが、目に見えるかたちになっていないことが多く、したがってその存在も知られていない。同プログラムは地域のすぐれた実践をかたちにして残す、という試みでもある。社会教育実践として、またはジェンダー問題学習として目に見えるものにしたい。2010年度には、開発したプロジェクトを映像化する試みを行った。

また「男女平等の職場づくり研究」を2008年度より着手し、調査研究はほぼ終了した。男女平等であるはずの公務員の職場を対象として、実際に生じている問題をインタビューにより調査している。プライバシー保護のため、注意を要する調査である。制度は完全に平等であるにもかかわらず、実際には男女間の格差が生まれるのは何故か？このような「間接差別」のテーマについては学生の関心も高く、当事者でさえ知らないことも多い。

ジェンダー問題についての意識の掘り起こしや問題解決策は、行政施策として行われてきた経緯がある。各地に男女共同参画センターが設立され、行政の首長部門に「男女共同参画課（係）」などが設置されている。しかし、ややもすると行政から市民に向けた「一方通行」になってしまうこともあり、「市民と行政の協働」は「ことばのみ」ということのないわけではない。2009年4月に、新たなプロジェクトとして「市民と行政のパートナーシップ研究会」を立ち上げた。阪神間のある市の、特徴的な制度を対象として、事例研究を行っている。「パートナーシップ」は第4回世界女性会議（1995年）で採択された「行動綱領」の文章中で用いられて以来、一種のブームのようになり、あちこちで多用されているが、その実体については不明である。1995年からすでに10年以上が経過しているにもかかわらず、「不明」のままであってはならない。「市民と行政のパートナーシップ研究会」は、地域で実践されてきた「市民と行政の協働」の内実をたどり、「協働」の意味や意義を明らかにしようとするものである。行政を研究対象とすることはある種の難しさがつきまとうが、2011年度には、かたちにしたいと願っている。



障害共生支援部門



担当：津田 英二
zda@kobe-u.ac.jp

「障害」を社会的な課題として捉えインクルーシブな社会をめざす

障害の問題を切り口にして、誰もが排除されずに幸福を追求できる社会をつくろうと努力すること、それが障害共生支援部門のミッションです。障害を社会的排除の問題として捉えることで見えてくる地平から、排除をなくそうと日々努力する社会＝インクルーシブな社会をめざしています。

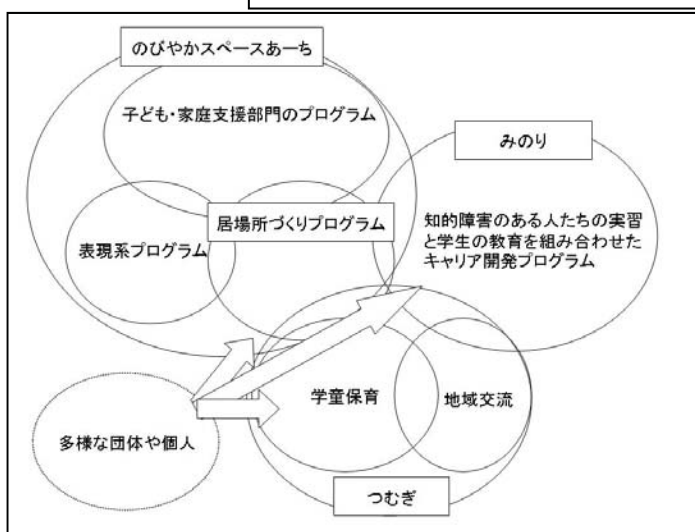
さまざまな人の関わりをつくる

排除された人たちは、私たちの目の前に現れにくくなります。つまり、社会的排除はふつうに生活していたら見えないものです。そこで、まず社会的排除の現実がよく見えるような場面をつくります。さまざまな人が関わりをつくる拠点です。障害共生支援部門は、3つの拠点の運営に関わっています。

課題に敏感なコミュニティをつくる

社会的排除を受けている人たちが目の前に存在し、表現し、語ること。それが、社会的排除のありかを最も効果的に示し、また集まってくる人たちが最も抵抗なく受け入れる方法だと考えます。そこで、存在し、表現し、語ることを促し、それを他者が豊かに感受する場面をつくっています。課題に敏感なコミュニティを形成すること、そこから新たな実践の展開への道が開かれていきます。

障害共生支援部門の実践的研究フィールド



旅に出て切磋琢磨する

障害共生支援部門が前提としている実践仮説、実践方法、そして日々の葛藤や喜びを開かれた議論の下に曝していくこと。また外からの刺激によって、私たちの実践的研究を脱構築していくこと。これが、研究機関としてのもうひとつのミッションです。そのために神戸、関西はもとより、全国そして海外にもネットワークを広げています。特に韓国ナザレ大学、ソウル市立知的障害者福祉館とは協定関係にあり、毎年両国で開催している研究集会などを通して、研究交流を深めています。

MORE INFORMATION: 津田英二『障害のある成人の学習支援論』学文社、2006年； 障害共生支援部門発行の報告書（『インクルーシブな地域社会創成のための都市型中間施設』2010年度、『共に生きる実践の足下を固める』2009年度、『インクルーシブな地域社会をめざす拠点づくり』2006年度、『当事者性を育てる』2007年度、『インクルーシブな社会をめざす実践』2008年度）； 津田英二（2006）「支えあう人間」ヒューマン・コミュニティ創成研究センター編『人間像の発明』ドメス出版； ホームページ <http://www2.kobe-u.ac.jp/~zda>

子ども・家庭支援部門



担当：伊藤 篤

ittoa@kobe-u.ac.jp

本レポートの「プログラム・モデル開発」「実践者支援」「ネットワーキング」に掲載していない当部門の他の事業および部門担当者の主な研究業績と主な社会的活動を紹介します。

<他の事業>

2009年度には、研究科の国際交流委員会および大学院GPとの連携により実施された学術交流研究会(学術ウィークス)の一環として、「イギリスの子育て支援に学ぶⅡ」を開催した。ロンドン大学教育大学院(IOE)から上席研究員を招聘し、イギリスの周産期におけるユニバーサル支援とターゲット支援の組み立てなどに関するセミナーを11月に2回(於研究科大会議室・あーち)実施した。2010年度には、研究科の国際交流委員会との連携により実施された学術交流研究会(学術ウィークス)の一環として、「イギリスの子育て支援に学ぶⅢ」を開催した。ロンドン大学教育大学院(IOE)から上席研究員を招聘し、「Every Child Matters; What future?」という演題で、イギリスの子育て支援にかかわる近年の政策動向と支援の実態などに関するセミナーを11月に実施した。いずれも、市町の児童館スタッフ、行政の保健師・助産師、NPOの支援者などに対する専門職支援と位置づけている。

<研究業績>

- ・寺村ゆかの・伊藤篤(2010) 子育て支援「つどいの広場」における相談のあり方に関する一考察Ⅱ - 大学サテライト施設における相談(2007年度~2008年度)分析を通して - 『心の危機と臨床の知(甲南大学人間科学研究所紀要)』第11巻 71-78
- ・伊藤篤(2010) 障害児の放課後保障に関する一考察 - 神戸市学童保育における障害児受け入れ実態調査から - 『子ども家庭福祉学』第9号 49-59
- ・寺村ゆかの・伊藤篤(2011) 子育て支援「つどいの広場」における相談のあり方に関する一考察Ⅲ - 大学サテライト施設でのアウトリーチ・サービス構築と相談実態・内容の整理 - 『心の危機と臨床の知(甲南大学人間科学研究所紀要)』第12巻
- ・2009年6月7日、日本子ども家庭福祉学会第10回全国大会において、自由研究発表(タイトル: つどいの広場における発達相談の特徴と可能性 - 大学サテライト子育て支援施設における事例をとおして -)をおこなった。【共同】(於日本福祉大学) 日本子ども家庭福祉学会第10回全国大会抄録・資料集 66 - 67
- ・2010年6月6日、日本子ども家庭福祉学会第11回全国大会において、自由研究発表(タイトル: 次世代育成支援プログラム「赤ちゃんふれあい体験学習」の効果 - 小・中・高校生に見られた乳児に対する共感性の変容に着目して -)をおこなった。【共同】(於 目白大学) 日本子ども家庭福祉学会第11回全国大会要旨集 118 - 119

<社会的活動>

新ひょうご子ども未来プラン策定協議会の委員(2009年度~) / 兵庫県社会福祉審議会臨時委員(少子・高齢社会ビジョン改定小委員会・子ども小委員会)の委員(2010年度~) / 兵庫県立こどもの館、子どもの生活習慣づくり行動指標策定委員会の委員長(2010年度) / 社団法人兵庫県保育協会の理事(2010年度~) / 明石市次世代育成支援対策推進行動計画推進協議会の会長(2010年度)など

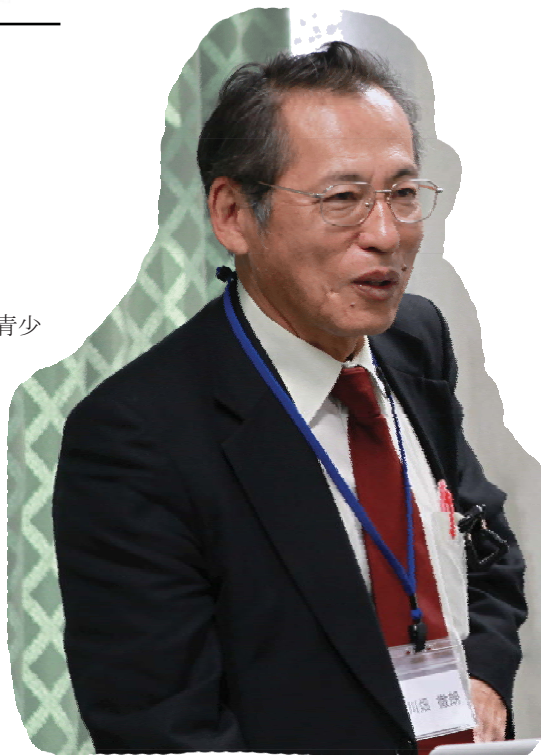


ヘルスプロモーション部門



担当：川畑 徹朗

tetsurok@people.kobe-u.ac.



今日の健康課題と密接な関係がある行動に焦点を当て、人々とりわけ青少年が健康を損なう恐れの高い危険行動を避け、健康を増進する行動を主体的に選択できるようにするための方策（環境づくりと健康教育）に関する研究を行っている。

2009年度は、青少年の喫煙、飲酒、薬物乱用を防止することを目指して、健全な自尊心、意志決定スキル、目標設定スキル、ストレス対処スキル、対人関係スキルなどのライフスキル（心理社会的能力）の形成を主な内容とするプログラムを新潟県の中学生を対象として実施し、その有効性に関する評価研究を行った。そして、前年度に開発した小学校6年生用のプログラムを2010年に出版した。また、青少年の早期の性行動を防止するプログラム開発のための基礎的資料を得るために、埼玉県川口市の某中学校の全生徒を対象とした縦断研究を2005年度より実施し、中学生の性交経験に関わる要因を分析した。また、そうした調査結果などにに基づき、ライフスキル形成を基礎とする性教育プログラム中学生版を開発した。また、本プログラムを中国の学校教育に適用するための研究プロジェクトを、上海大学と協同して2010年に発足させた。

以上のヘルスプロモーションに直接関わる研究だけではなく、兵庫県三田市教育委員会と連携して、健全な自尊心を育て、学ぶ意欲を高めるための共同研究にも着手し、2006年度より毎年、三田市内の全ての小学校5年生と中学校1年生を対象とした実態調査を実施してきた。また、2008年7月と2009年8月には保護者を主な対象としたシンポジウムにおいて、調査結果を報告した。

また2007年度から、新潟市教育委員会と連携し、いじめを防止するためのプログラム開発に取り組んでいる。本プログラムの土台となるのは、主任研究者が中心となって開発したライフスキル教育プログラムであり、健全な自尊心、意志決定スキル、ストレス対処スキル、対人関係スキルの形成が中心的内容となる。なお、2008年8月には新潟市の小学校教員を対象としたいじめ防止に関するワークショップを、2009年8月には中学校教員を対象としたワークショップを、2010年8月には小学校と中学校の教員を対象としたワークショップを開催した。

2009年度には、兵庫県警及び姫路市教育委員会と連携して、青少年の非行防止に関するプロジェクトを発足させ、姫路市内の某中学校区における取組を開始した。2010年度には、予備的研究授業を小学校と中学校でそれぞれ行った。

- ・ JKYB ライフスキル教育研究会（代表 川畑徹朗）編著：「しなやかに生きる心の能力」を育てる JKYB ライフスキル教育プログラム 小学校6年生用。東山書房、2010。
- ・ 財団法人日本学校保健会編：喫煙、飲酒、薬物乱用防止に関する指導参考資料 小学校編、勝美印刷、2010。
- ・ 今出友紀子、川畑徹朗：中学生の喫煙、飲酒開始に関わる要因。神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要、2010；4(1)：17-26。

出版物の紹介

・JKYB ライフスキル教育研究会（代表 川畑徹朗）編著：「しなやかに生きる心の能力」を育てる
JKYB ライフスキル教育プログラム 小学校6年生用 東山書房、2010.



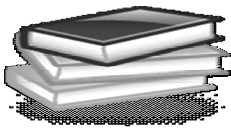
本プログラムのねらいは、セルフエスティームの形成を中心とするライフスキル（心の能力）を高めることによって、子どもたちが喫煙、飲酒を始めとする危険行動を避けるとともに、自分らしく有意義な人生を送ることを支援することにある。

本書は、「基礎編」と「実践編」から構成され、実践編には以下の指導案が掲載されている。

1. おたがいをよく知ろう
2. 友だちをほめよう
3. 私の伝えたいこと
4. 争いごとになる前に
5. 広告を調べよう
6. プレッシャーに負けないで
7. 目標に取り組もう
8. 成功のイメージをもとう
9. 前向きな自己会話
10. 失敗なんてありえない
11. ボランティア活動-地域で-

本書には、全ての活動シートや掲示用資料、そして評価に用いる調査票や調査実施手引書を収録した CD-ROM も付録としてついており、印刷して授業ですぐに活用できるようになっている。

朴木佳緒留監修、神戸大学大学院人間発達環境学研究科ヒューマン・コミュニティ創成研究センター、ジェンダー研究・学習支援部門編『なくそう！スクール・セクハラ 教師のためのワークショップ』かもがわ出版、2009.



Co-workers

子ども・家庭支援部門

学内部門研究員

木下 孝司 人間発達環境学研究科教育・学習専攻
目黒 強 人間発達環境学研究科教育・学習専攻

学外部門研究員

竹内 伸宜 神戸海星女子学院大学
野口 真紀 灘区地域活動支援コーディネーター
三村 裕一 神鋼不動産㈱
越智 正篤 六甲道児童館
金坂 尚人 特定非営利活動法人 S-space
藤井 良三 神戸海星女子学院大学
川谷 和子 関西福祉専門学校
宮口 智恵 特定非営利活動団体 ファイルト・リソースセンター

障害共生支援部門

学内部門研究員

白杉 直子 人間発達環境学研究科人間環境学専攻
中林 稔堯 人間発達環境学研究科心身発達専攻

学外部門研究員

小林 繁 明治大学
前田 優子 クエスト総合研究所
植戸 貴子 神戸女子大学
横須賀 俊司 県立広島女子大学
江谷 博子 クエスト総合研究所

ヘルスプロモーション部門

学内部門研究員

石川 哲也 人間発達環境学研究科心身発達専攻
中村 晴信 人間発達環境学研究科心身発達専攻

学外部門研究員

西岡 伸紀 兵庫教育大学大学院学校教育研究科
春木 敏 大阪市立大学大学院生活科学研究科
堀 徹 新潟市立潟東中学校
吉田 聡 大津市南郷小学校
佐藤 恵子 新座市教育委員会
岩澤 奈々子 川口市立榛松中学校
坂井 知子 川口市立南中学校
佐々木 寛 広島市立瀬野川中学校
池田 真理子 福山市箕島小学校
並木 茂夫 財団法人日本学校保健会
坂井 満 朝倉市甘木中学校
牧野 淡紅恵 新潟市立新津第一中学校
鬼頭 英明 兵庫教育大学大学院学校教育研究科
工藤 ひとし 村上市立朝日中学校

ボランティア社会・学習支援部門

学内部門研究員

太田 和宏 人間発達環境学研究科人間環境学専攻

学外部門研究員

原田 正樹 日本福祉大学
渡邊 一真 京都府社会福祉協議会
名賀 亨 華頂短期大学
大本 晋也 兵庫県教育委員会社会教育課
橋本 久仁彦 プレイバックシアター
石原 勝利 久御山町社会福祉協議会
片岡 正純 綾部市社会福祉協議会
中林 洋亮 京田辺市社会福祉協議会
西 修 神戸ワークショップ研究会
賀川 督明 賀川豊彦記念館
小林 洋司 あかねが丘学園
木村 純子 あかねが丘学園
阿波 美織 なだ障害者地域生活支援センター

ジェンダー研究・学習支援部門

学外部門研究員

石崎 和美 むこがわCAP
小河 洋子 大阪女子大
行平 敬子
片倉 佐知子
福田 悦子
松本 由美子
西山 こずえ
長澤 雅江 逆瀬川あゆみ保育園（せいいい事業団）
波多江 みゆき
大野 浩史
片山 実紀
田中 利明

労働・成人教育支援部門

学内部門研究員

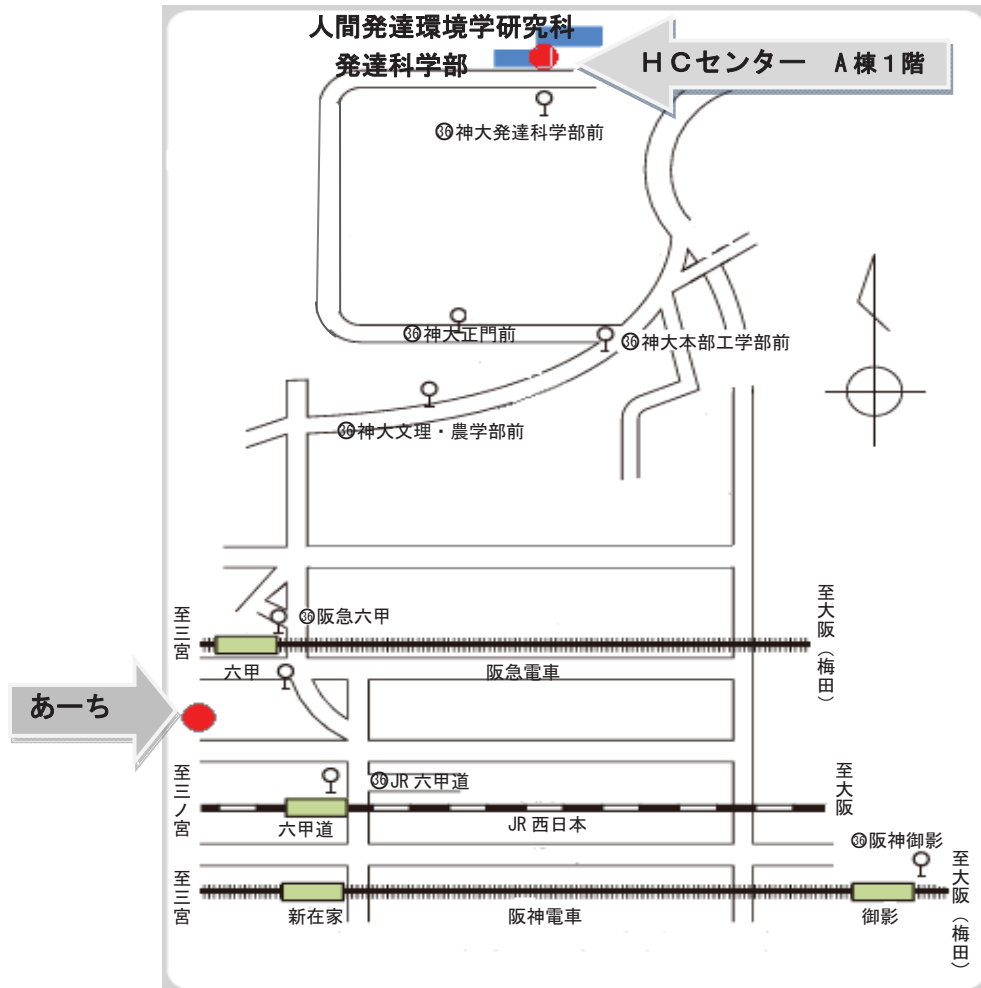
二宮 厚美 人間発達環境学研究科人間環境学専攻
澤 宗則 人間発達環境学研究科人間環境学専攻
白水 浩信 人間発達環境学研究科教育・学習専攻
岩佐 卓也 人間発達環境学研究科人間環境学専攻
森岡 正芳 人間発達環境学研究科心身発達専攻

学外部門研究員

西村 いつき 兵庫県農政環境部農林水産局農業改良課
堂馬 英二 ワークスタイル研究所
田中 賢作 フリースペース「SAKIWA」
頼田 稔 阪神人形劇連絡協議会・あ〜ち人形劇連絡会
松本 とし子
余田 卓也
竹内 正巳 西宮市都市整備公社
濱元 一美 関西女子短期大学
衣川 千晶 働ひょうご環境創造協会
梶見 和孝
高瀬 優子
川崎 孝生 マイクロンジャパン㈱能力開発
曾我 邦子

Access

阪急電鉄「六甲」駅、JR西日本「六甲道」駅
 阪神電鉄「御影」駅のいずれかより
 神戸市バスの36系統「鶴甲団地」行き
 (「鶴甲2丁目止」行きでも可)に乗りし
 「神大発達科学部前」バス停車



Staff

■センター長

朴木 佳緒留 (人間発達環境学研究科長・兼任)

■子ども・家庭支援部門

伊藤 篤 (専任研究員・教授)

■障害共生支援部門

津田 英二 (専任研究員・准教授)

■ジェンダー研究・学習支援部門

朴木 佳緒留 (専任研究員・教授)

■ヘルスプロモーション部門

川畑 徹朗 (専任研究員・教授)

■ボランティア社会・学習支援部門

松岡 広路 (専任研究員・教授)

■労働・成人教育支援部門

末本 誠 (専任研究員・教授)

■ESDサブコース

高尾 千秋 (助教)

事務局

■のびやかスペースあーち専従事務スタッフ

中西 美智子 橋 京子

渡辺 知津子 山名 睦子

芝池 祐子

■あーち教育研究スタッフ

寺村 ゆかの 井手 良徳

■ヒューマン・コミュニティ創成研究センター専従事務スタッフ

千葉 佳代子

The logo consists of the letters 'Hc' in a white, elegant, cursive script font.

Action Research Center
for Human & Community Development

ヒューマン・コミュニティ創成研究センター

神戸大学大学院人間発達環境学研究科

〒657-8501 兵庫県神戸市灘区鶴甲 3-11 TEL:078-803-7970 FAX:078-803-7971

<http://www.h.kobe-u.ac.jp/2141> email: hc@ml.h.kobe-u.ac.jp

Action Research Center for Human & Community Development (HC Center)

Graduate School of Human Development and Environment, Kobe University

3-11 Tsurukabuto, Nada-ku, Kobe, JAPAN 657-8501 TEL+81-78-803-7970 FAX+81-78-803-7971